

 「サイドラインに立つ大人たち」……保護者の応援がチーム文化をつくる

体育館の空気には、独特の張りつめ方がある。

コートに立つ子どもたちの鼓動と、コートサイドの保護者が胸に秘める期待が混ざり合い、その温度がそのまま試合の表情を形づくる。

応援は、子どもにとって最も身近なエネルギーだ。

しかし、同じ声援でも、届き方は一つひとつ違う。

「がんばれ」は励ましになるが、「どうしてできないんだ」は刃になる。

指導者の指示と異なる声が飛べば、子どもは迷う。

審判に向けた厳しい言葉があれば、試合の空気が濁る。

スポーツが本来もつ「学びの場としての透明さ」が、わずかに陰る瞬間だ。



子どもたちは、誰よりも周囲の大人たちをよく見ている。

正々堂々と戦う姿勢や、仲間を尊重する態度は、コート外の**大人の立ち居振る舞い**からも伝わる。

勝敗に一喜一憂しながらも、最後は互いを称え合うチームの空気。

そこには、**保護者のふるまい**が静かに影響している。



「応援する大人の背中」は、子どもにとって**もう一つの教科書**だ。

保護者は、意識しないうちに「**第三の指導者**」になっている。

声を荒らげる必要はない。

まなざし一つ、拍手ひとつが、子どもの競技人生の質を変える。

緊張の中でプレーする子どもにとって、その一拍は大きな支えにも、重荷にもなり得る。

いま、スポーツの価値が問い直されている。

勝つか負けるかの二択では捉えきれない「**子どもたちの経験の質**」をどう守るか。

その答えは、指導者だけに委ねるものではない。

保護者や周囲の大人が肩を並べて取り組むとき、ようやく本当のチーム文化が生まれる。

子どもがのびのびと挑戦し、失敗を恐れず、仲間を信じる。

スポーツが子どもの人生を太く、豊かにする力をもつために。

その鍵を握っているのは、今日も静かに見守る大人たちである。

** 「余録」 **

同じユニフォーム、違う背中……



三月は子どものユニフォームが、少しだけ小さく見える季節です。
いつの間にか背が伸び、声変わりをし、プレーの選択にも成長が感じられるようになりました。
同じ体育館に通う日々も、気づけば残りわずかかもしれません。

この時期の応援席には、期待と不安が入り混じります。

「この子は次のステージでもやっていけるだろうか……」「もっとできるはずなのに……」

そんな思いが、知らず知らずのうちに声に乗ってしまうことがあります。

応援は本来、子どもの心を軽くするためのものです。

「大丈夫！」

「いいチャレンジだったよ」



その一言で、表情がふっと和らぐ瞬間を、私たちは何度も目にしてきたはずです。

それでも、つい口を出したくなる場面があります。



「今は違う！」

「周りを見て！」

我が子だからこそ、わかっているつもりになり、先回りしてしまうのかもしれませんが。

けれど、子どもが本当に身につけていくのは、正解を教えられた記憶ではありません。

迷い、失敗し、悔しさを味わいながら、自分で選び取った経験そのものです。

三月は、手を少しずつ離していく練習の季節なのだと思います。

声をかける代わりに拍手を送り、指示を出す代わりに、目を合わせてうなづく。

「信じています」という無言のメッセージを、そっと届けていきたいものです。

応援とは、導くことではなく、寄り添うことです。

前に立つのではなく、後ろから背中を支えること。

この春、新しい学年や新しい環境へ向かう子どもたちに、私たちは何を残せるでしょうか。

答えを与える声よりも、挑戦を受け止める静けさを。

その積み重ねこそ、子どもが次の一步を踏み出す力になるはずです。

「春風や闘志いだきて丘に立つ（高浜虚子）」